福岡市埋蔵文化財調査報告書第623集

部木古墳群

2000

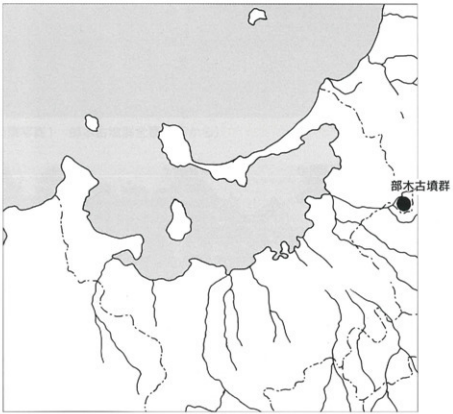
福岡市教育委員会

福岡市
教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第623集

HE KI

部木古墳群



部木古墳群第2次
遺跡略号　HEK-2
調査略号　9857

2000

福岡市教育委員会

巻頭写真1　部木古墳群全景（西から）

巻頭写真2　1号墳全景（西から）

序　文

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会ではこれまでに地域に残る前方後円墳について歴史的意義を探るため重要遺跡確認調査を行ってきました。今回報告する部木古墳群は粕屋平野に位置しており、前方後方墳である1号墳を中心とした古墳群として知られていました。今回の調査で古墳群全体の測量調査と1号墳のトレンチ調査を行い、部木古墳群を地域の貴重な遺産として今後に伝えていく上で貴重な成果をあげることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にご理解を賜り、ご協力を頂きました部木八幡宮宮司豊丹生信様、責任役員柴田道春様、小山重三郎様、松永美好様、伊東日出磨様を始めとする地元住民の方々、氏子の方々には厚くお礼申し上げます。

平成12年2月15日
福岡市教育委員会
教育長　西　憲　一　郎

例　言

1．本書は東区蒲田3丁目761番～765番に位置する「部木古墳群」について、福岡市教育委員会が国庫補助を得て（1998年度）に実施した部木古墳群の重要遺跡確認調査の報告書である。なお部木古墳群の調査は今回が第2次の調査となる。
2．遺構の実測は長家伸、高橋健治、伊藤健太、坂本真一、今塩屋毅行、平本恵子が行った。
3．遺物の実測は吉留秀敏が行った。
4．製図は長家、今村佳子が行った。
5．遺構写真は長家が撮影した。
6．本書で用いる方位は磁北であり、真北から6°21′西偏する。
7．本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので活用されたい。
8．本書の執筆・編集は長家があたった。

本文目次

Ⅰ　はじめに……1
　1　調査に至る経過……1
　2　調査体制……1
Ⅱ　遺跡の立地と環境 ……2
　1　立地と周辺の遺跡について ……2
　2　周辺の前方後方墳について ……3
Ⅲ　調査の成果 ……7
　1　調査の経過 ……7
　2　1号墳 ……7
　3　2号墳 ……10
　4　3号墳 ……10
　5　4号墳 ……11
　6　5号墳 ……11
　7　6号墳 ……11
　8　7号墳 ……12
　9　8号墳 ……12
　10　9号墳 ……13
　11　小結 ……13

挿図目次

第1図　調査区位置図1（1/50,000)…… 4
第2図　調査区位置図2（1/4,000)……5
第3図　調査区位置図3（1/1,000)…… 6
第4図　調査区全体図 (1/400) …… 折込
第5図　1号墳実測図 (1/200) …… 8
第6図　1号墳トレンチ実測図 (1/80)…… 9
第7図　1号墳溝出土遺物実測図 (1/1) …… 9
第8図　2号墳実測図 (1/200) ……10
第9図　3号墳実測図 (1/200) ……11
第10図　4号墳実測図 (1/200) ……11
第11図　5・6号墳実測図 (1/200) ……12
第12図　7・8・9号墳実測図 (1/200) ……13

写真目次

巻頭写真1　部木古墳群全景（西から）
巻頭写真2　1号墳全景（西から）

写真1　天神森古墳出土
　　三角縁三神三獣鏡(参考資料)
写真2　調査区遠景(西から)
写真3　調査区全景(北西から)
写真4　調査区全景(真上から)
写真5　1号墳全景(西から)
写真6　1号墳前方部から後方部を見る
写真7　1号墳東部周濠・周堤(南から)
写真8　1号墳トレンチ　1(西から)
写真9　1号墳トレンチ　2(北から)
写真10　1号墳トレンチ　3(北西から)
写真11　1号墳トレンチ　4(西から)
写真12　1号墳トレンチ　5(東から)
写真13　2号墳(南から)
写真14　2号墳(南西から)
写真15　3号墳（北から)
写真16　4号墳(東から)
写真17　5号墳(東から)
写真18　6号墳（東から)
写真19　7号墳（西から)
写真20　8号墳（西から)
写真21　9号墳（北から)

Ⅰ　はじめに

1．調査に至る経過

部木古墳群は福岡市東区蒲田７６１番～７６５番に位置する。所在地は部木八幡宮の所有地で、現状では社務所・拝殿等の神社施設設備箇所は整地がなされている。古墳群は社務所の南西隅に位置し全体に檜の植林が行われている。部木古墳群は前方後方墳１基と円墳７基からなる古墳群として知られており、福岡市文化財分布地図に記載されている（分布地図番号2-0005・遺跡略号ＨＥＫ）。特に１号墳は数少ない前方後方墳として知られ、１９７１年２月１１日に福岡市教育委員会により測量調査が行われ（第１次調査）、成果は福岡市埋蔵文化財遺跡地名表総集編（『福岡市埋蔵文化財調査報告書第１２集』１９７１年）に掲載されている。その後本古墳群は神社有地ということもありおおよそ現況を損なうこと無く現在にいたっている。

福岡市教育委員会では重要遺跡の確認・保存を行うため国庫補助をうけて重要遺跡確認調査を行ってきたが、今回の調査もこの一環で部木古墳群全体の現況測量調査及び１号墳にトレンチを設定し規模・構造確認を目的とする発掘調査を行うこととした（部木古墳群第２次調査　調査番号９８５７）。調査は平成１１年１月１８日～平成１１年３月５日の期間で行った。調査面積は測量調査が4,５００㎡、１号墳に設定したトレンチ調査は１０㎡である。遺物は表採遺物はなく１号墳トレンチ内から黒曜石剥片が１点出土するのみである。調査に当たりましては部木八幡宮宮司豊丹生信様、責任役員柴田道春様、小山重三郎様、松永美好様、伊東日出磨様を始めとして、地域住民・氏子の方々には調査の趣旨についてご理解を得ると共に多大なご協力を賜りました、ここに記して謝意を表します。

2.調査体制

調査名　部木古墳群の重要遺跡確認調査
調査主体　教育委員会埋蔵文化財課
調査総括　埋蔵文化財課長 柳田純孝（前任）　山崎純男（現任）
　　調査第２係長 山口譲治（前任）　力武卓治（現任）
調査担当　調査第２係 長家伸
庶務担当　文化財整備課　谷口真由美

なお調査に当たっては現地の下草刈り・清掃・発掘作業をおこなった作業員の方々にも感謝したい。

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1.立地と周辺の遺跡について

部木古墳群は福岡市東区の東端に位置し、若杉・三郡山地～宝満山および月隈丘陵で画されたいわゆる粕屋平野内に位置する。粕屋平野は現行行政区画では福岡市・久山町・粕屋町・篠栗町・宇美町・須恵町の自治体にまたがり、多々良川・宇美川・須恵川による沖積平野と山地から派生する台地で構成され河川が博多湾に注ぐ平野前面部分にはこれをふさぐように砂丘が形成され平野部との間に広範囲な後背湿地を形成している。今回報告する部木古墳群は三郡・若杉山地から西側に延びる台地の先端部にあたり、沖積扇状平野の前面に位置する。台地は多々良川と久原川に挟まれ、表層地質はＡＳＯ-４火山灰を欠く中位段丘構成砂礫層が露出している。古墳群は東西に延びる台地の尾根線上を中心に形成されている。標高は東側で２１ｍ、西端で１４ｍを測る。

周辺の遺跡群の概要等については既刊報告書に詳しいのでここでは割愛して、古墳群と関連する時期の調査事例について簡単に述べておきたい。部木古墳群周囲の遺跡群は、古墳群と同じ久原川と多々良川にはさまれた丘陵および前面の微高地上に立地する。高速道路・工場建設・圃場整備等に伴い調査が行われているが古墳時代前期の遺構は検出事例が比較的少なく古墳を築造した集団については不明な点が多い。古墳群前面の沖積地では蒲田部木原４次で弥生時代後期～古墳時代初頭の集落の一部が検出されている。また北側の丘陵上で調査された蒲田水ヶ元遺跡では時期はやや下るが弥生時代後期～終末期の大規模な集落・方形周溝墓（？）が検出されている。また出土遺構は不明ながら方格規矩鏡破片も出土している。また蒲田水ヶ元遺跡の南側の同一丘陵上では蒲田部木原２・３次調査で弥生時代後期後半～古墳時代初頭の住居都が検出されている。以上のように調査事例は比較的少ないながらも部木古墳築造を支えた集団およびその前身となる集落が周辺に形成されていたことが明らかとなっている。

粕屋平野内の前期古墳を中心に若干述べておきたい。まず古墳築造の前段階である弥生時代終末期の首長墓が数基確認されており、粕屋町上大隈平塚遺跡・福岡市名子道２号・須恵町酒殿遺跡で箱式石棺墓が調査されている。また志免町亀山古墳も大型の箱式石棺墓で終末期の墳丘墓の可能性が考えられている。主な遺物としては平塚遺跡では連弧文鏡、酒殿遺跡では獣首鏡と小型倣製鏡が出土している。

これに続く古墳時代前期には多々良川下流域と宇美川中流域の２地点に古墳が築造される。平野の海側前面にあたる多々良川下流域では博多湾に面する丘陵上に名島１号墳・香住ヶ丘古墳、多々良低右岸に天神森古墳、左岸に今回報告する部木古墳群が築造される。名島古墳は平野内最古の前方後円墳である。前方部が撥形に開き全長約３０ｍを測る前方後円墳で後円部には盛り土が行われるが前方部は地山削り出しで成形されている。主体部には石材を用いておらず理置には粘土を用いており三角縁神獣鏡1面・鉄剣２～３本が副葬されていた。またこれに隣接する名島２号墳がこれに継続する可能性がある。香住ヶ丘古墳（円墳？）は博多湾に突き出す丘陵上に位置する。未調査のまま破壊されたが三角縁二神二獣鏡が出土している。天神森古墳（墳形不明）は道路工事中に鏡が出土したため知られた古墳であるが未調査のまま破壊されている。墳丘形状・主体部等は不明であるが前方後円墳で木棺直葬の可能性が高い。出土鏡は三角縁天王日月三神三獣鏡１面と盤龍鏡１面である。多々良川下流域ではこれらに続いて鳥栖原古墳が築造される。全長３７.４ｍの造り出し付き円墳で木棺直葬である。副葬遺物として鉄製の方形板刃先・袋状斧・鎌・刀子が出土している。

宇美川中流域では全長５２ｍの前方後円墳である光正寺古墳が知られる。平野内最大の古墳で宇美

川右岸の丘陵上に位置し前方部２段後円部３段に築成されている。第１主体は確認していないが第２主体として箱式石棺が確認されている。同時期には塊田古墳などが知られている。これに続いて宇美川左岸の月隈丘陵上に萱葉２号・３号墳が築造される。萱葉２号墳は全長２６ｍの前方後円墳で竪穴式石室を有する。光正寺古墳の北側丘陵上に位置する七夕池古墳（円墳）も萱葉２号と同時期であろうか。

以上簡単に前期古墳のあり方を概観したが、大型墳の継続的な築造といった現象は認められず隣接する福岡平野でのあり方とは大きな格差を感じさせる。政治的優位性といった点で劣勢にたたされていたのであろう。また平野内の首長系譜についても名局古墳を初出として以降明確な系譜を追うことができない。ここでは２グループに分けて述べたが、さらに複数の小グループに分散すると考えられこれらの諸勢力が個別に古墳を築造していく状態が今回報告する部木古墳群を含む多々良川下流域に特に顕著に認められる。

２.周辺の前方後方墳について

本調査は前方後方墳として周知されている部木１号墳の確認調査を主目的としている。そこで周辺に立地する既知の前方後方墳について列記し、参考資料としておきたい。

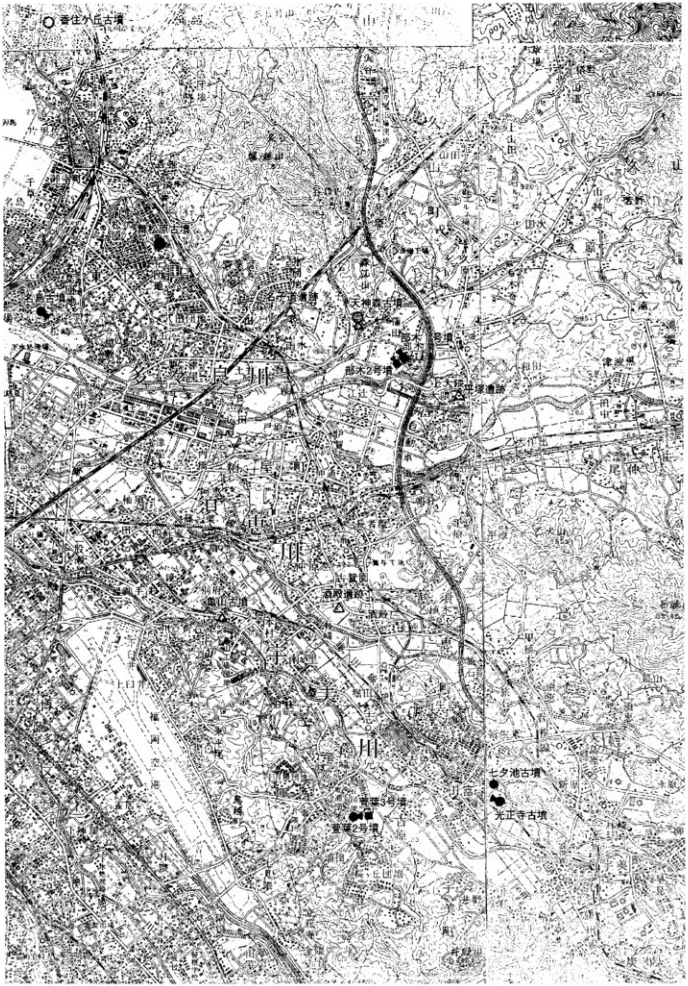
福岡市域では部木１号墳の他に確認されている前方後方墳は樋井川流域の丘陵上に位置する京ノ隈古墳１基のみである。京ノ隈古墳は前方部がすでに失われていたが宅地造成に先立つ調査でくびれ部分が確認され墳長は４０ｍ弱の前方後方墳と確認された。墳丘は後方部の一部を除き大半が地山削り出しによって成形され前方部・後方部ともに二段に築成される。埋葬主体は後方部に割竹形木棺１基と前方部に箱式石棺１基が造られ、割竹形木棺から鉄製の剣・ヤリガンナ・鋤先が１点ずつ出土している。また後方部中央には経塚２基が造られている。

また那珂川流域では那珂川町所在の妙法寺２号墳があげられる。古墳は那珂川中流域の丘陵上に立地し、推定墳長１８ｍを測る。墳丘は地山整形を行った後前方部で２０㎝以下後方部で６０㎝ほどの盛り土を行っている。埋葬主体は後方部に割竹形木棺１基・後方部に箱式石棺１基が造られている。木棺からは三角縁六神四獣鏡１面・勾玉・管玉・ガラス製丸玉・鉄斧１・鉄製ヤリガンナ１・鉄製刀子１が出土し、石棺棺外から鉄鏃が１点出土している。

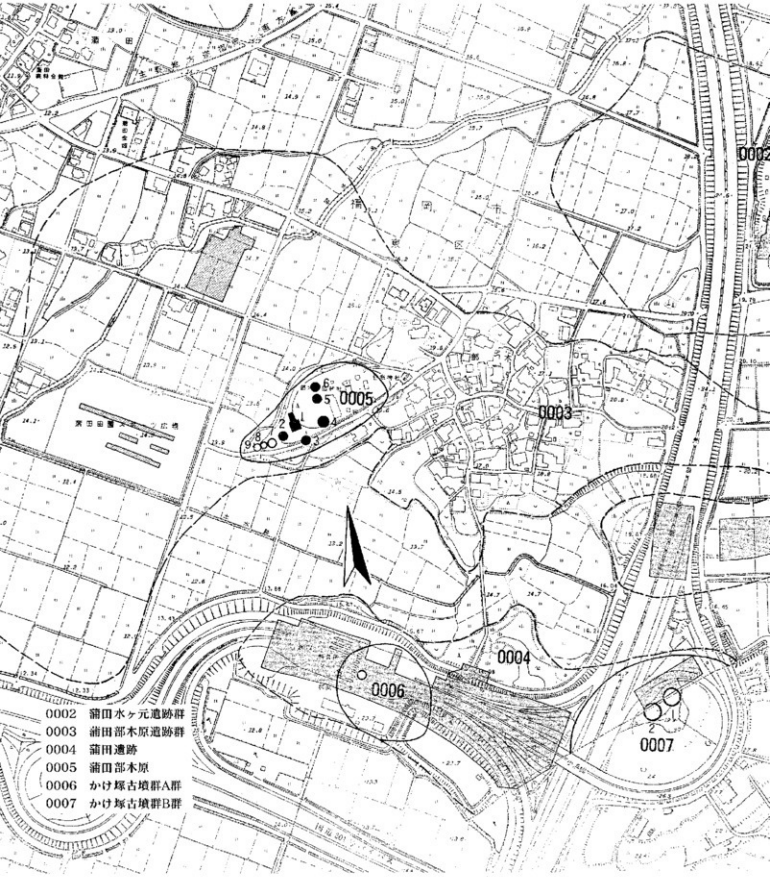
福岡市の西隣志摩町所在稲葉２号墳は墳長２０ｍを測る。前方部・後方部に１基ずつの箱式石棺が存在し、後方部の主体部からＵ字形の鉄器が出土している。

筑前の南部地域では夜須町焼の峠古墳があげられる。墳長４０ｍの比較的大型の前方後方墳である。葺石はなく内部主体は不明である。周濠を有しここから二重口縁壺などを含む多くの土師器が出土している。

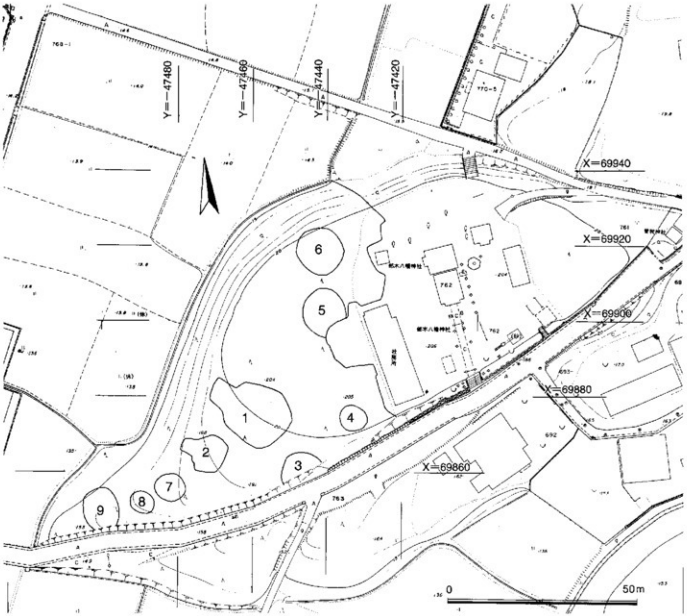
肥前地域では鳥栖市赤坂古墳、神埼郡吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区ＳＴ０９４１、ＳＴ０９４２があげられ、いずれも最古式の古墳と考えられる。赤坂古墳は墳長２４ｍをはかり周濠を有する。内部主体は不明で墳丘には葺石はなく１段の築成である。周濠・墳丘から二重口縁壺・小型壺・器台が出土している。いずれも削平により墳丘を欠失し主体部も不明であるが、周濠が残っており墳長はそれぞれ２６ｍ・２０ｍと考えられる。



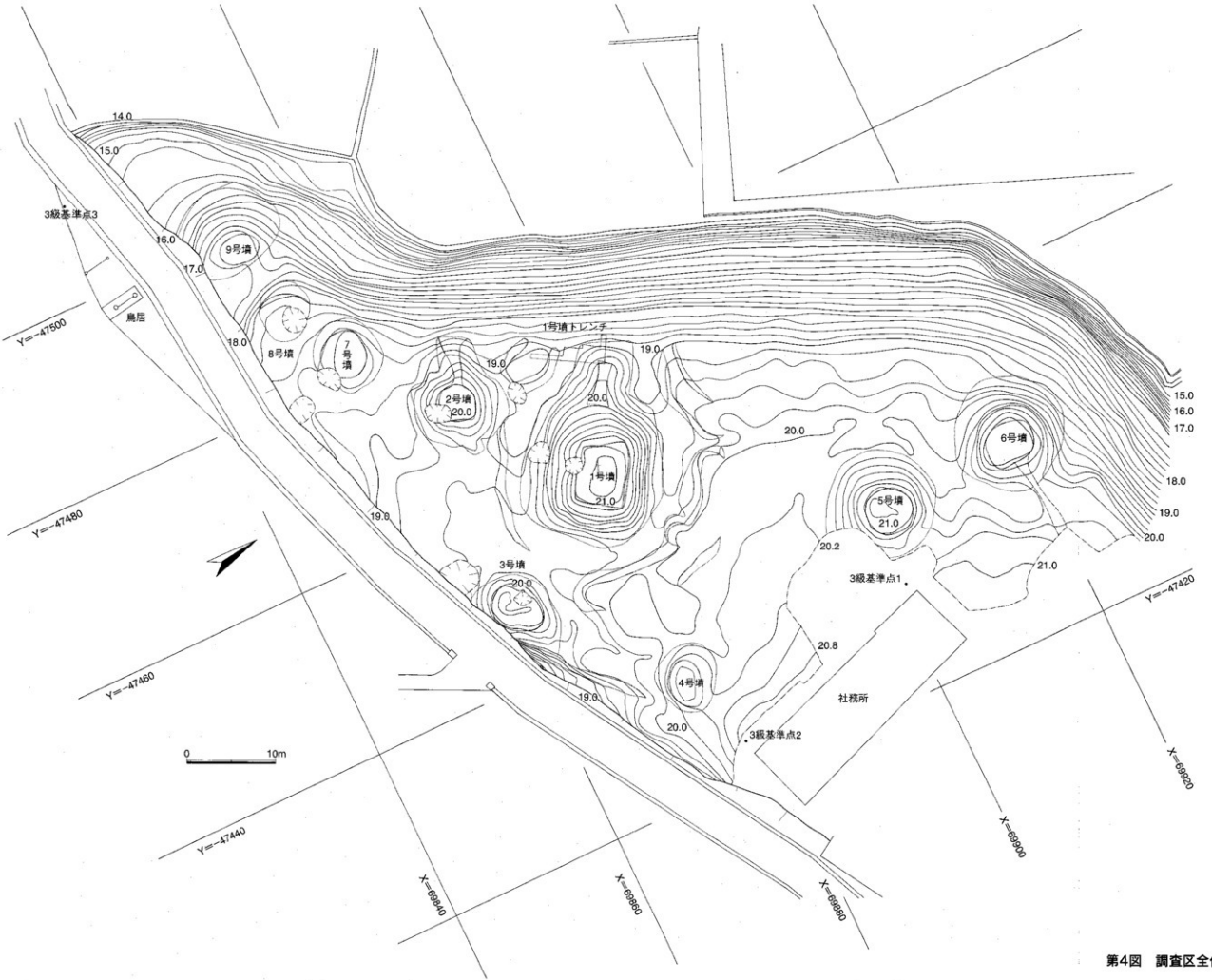
第1図　調査区位置図1（1/50,000）



第2図　調査区位置図2（1/4,000）



第3図　調査区位置図3（1/1,000）



3級基準点 1
X=69901.621
Y=−47432.200
Z=20.547
備考
福岡市教育委員会2−1

3級基準点 2
X=69877.861
Y=−47423.945
Z=20.621
備考
福岡市教育委員会2−2

3級基準点 3
X=69835.162
Y=−47510.660
Z=14.740
備考
土木局1級基準点1GI4−001

第4図　調査区全体図（1/400）

Ⅲ　調査の成果

1) 調査の経過

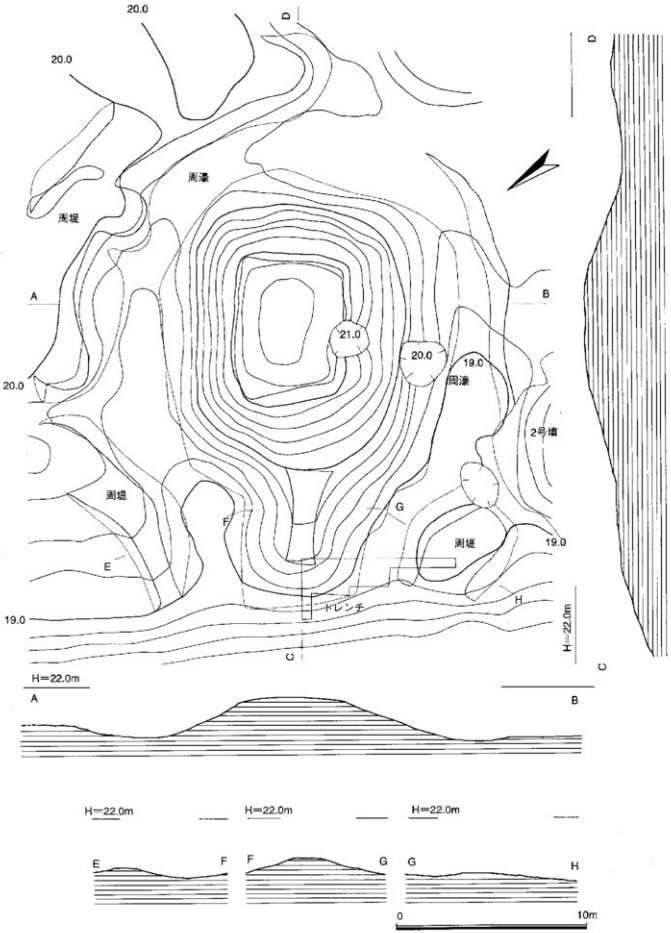
部木古墳群は過去の踏査で８基が確認されている。今回の調査は周辺の踏査・古墳群の測量・１号墳の規模確認調査が目的である。Ｉの項で述べたように古墳群所在地は部木八幡宮の所有地で、現状では社務所・拝殿等の神社施設設置箇所は整地がなされて、古墳群は社務所の南西側に位置している。

平成１１年１月１８日に調査の始めに神社有地を中心として周囲の踏査を行ったがこれ以外の古墳は確認できず、遺物も採集していない。この結果現状では古墳群は既知の地点（約４,５００㎡）に限られることが確認された。現況では古墳群周辺は古墳上も含めて檜の植林が成されるとともに対象地全体に背丈程の雑草が生い茂り進入を困難にしている。このため１月１９日に器材の搬入を行い、翌２０日から古墳群の測量調査を行うに当たり対象地内の下草刈りから作業を開始した。下草刈りと並行して１/１００の現況測量図の作成を行った。なお下草刈りと同時に遺物の収集に努めたが収集遺物は無かった。また古墳に伴う石材の露出は確認できなかった。下草除去後の踏査により対象地西側に円墳墳丘の痕跡を確認したため計９基の古墳群となった。また現況では社務所西側全面と北側斜面と南側の東側におおよそコ字状に樹齢６０年程度の檜がほぼ３ｍピッチで植えられているが、１号墳から西側は１９９１年の台風災害により大半が倒れたため植樹をしなおしている。木根による墳丘等の破壊とともに倒木により根が起き上がり墳丘上などに多くの倒木痕跡を残し墳丘崩壊を進めている。墳丘の保護と植樹の兼ね合いが今後問題となるであろう。

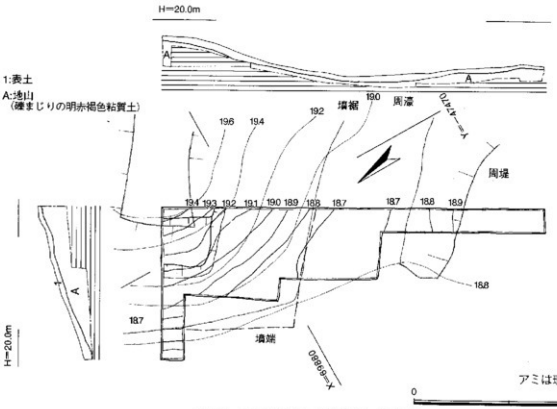
現況測量図作成終了後に１号墳の規模確認の為のトレンチを設定する事となったが、２月１７日に氏子の方々と現地で協議を行い、檜に影響の無い部分での調査を要請された。１号墳は踏査の結果周濠・周堤をもつ前方後方墳であることが確認されたがいずれにも植林が密におこなわれており、かろうじて前方部西側に空間が存在しこの部分のみのトレンチ調査（１０㎡）を行うことで協議が成立した。２月１９日から掘り下げを行った。調査の結果遺物は表土からの黒曜石剥片のみで古墳の時期は不明なままであったが、少なくとも前方部は削りだしによって整形されていることや墳丘・周濠・周堤上には現在の表土が２０㎝程度乗っているのみで腐食土の形成は認められないことから、現況状態が遺存状況を良く示していると考えられる事などが判明した。２月２６日にトレンチ調査の終了後、埋め戻しを行い現状復旧を完了した。その後図面の補正作業等を行い３月５日に器材の撤去を行い調査を終了した。

2) 1号墳

古墳群の中央に位置する。現況で墳長２３ｍ、前方部最大幅６.５ｍ、後方部最大幅１６ｍを測る前方後方墳である。前方部・後方部ともに１段の築成で葺石は認められない。主軸方位をＮ－５２°-Ｗにとる。後方部高さは２ｍ、墳頂部には５ｍ×７ｍの平坦面を形成している。前方部は高さ０.７ｍを測り、頂部平坦面は長さ４ｍ、幅１.５ｍ～２ｍである。墳形はほぼ左右対称で均整がとれているが、北半分がくびれ部分等の屈曲が明瞭となっているのに比べて南側は全体に墳丘の傾斜がなだらかでくびれ部の屈曲や後方部の端部がやや不明瞭となっている。前方部前面は丘陵西側斜面に向しており、この部分を除いて墳丘をコ字状に取り囲もうように周濠及び周堤が残っている。周濠は幅３～６ｍ高さ１０～６０㎝を測る。周堤は幅２ｍ程度で高さ１０～１５㎝を測る低平なもので、北側半分でより明瞭に観察できるが南半分は２号墳により破壊されていることもあり周堤は不明瞭である。前方部全面から周堤端まで含めた全長は３０ｍである。また現在は倒木により墳丘全面に新たな植樹が行われており将来的な墳丘の破壊が懸念される。



第5図　1号墳実測図（1/200）

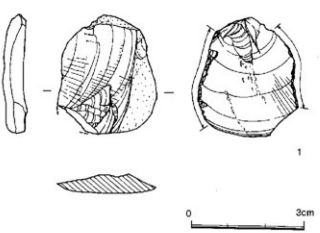


第6図　1号墳トレンチ実測図（1/80）

1号墳の墳丘確認のため前方部前面・西側墳端～周堤にかけて略L字状にトレンチを設定した。調査の経過の項でも述べたように地元から格へ影響を与えないようにとの要望を受けて植樹の行われていない箇所へ部分的にトレンチを設定している。この結果トレンチ内全体で現在の表土を10～20cm除去した直下で地山である礫まじりの暗赤褐色土があらわれる。これは周濠内も同様で腐食土層が全く形成されていない。この結果現状では前方部前面部分については切土による地山整形を行ったと考えられる。周堤部も同様に切土によるものであろう。また周濠部分に埋め土が全く存在していないことから、ここでは腐食土等が形成されにくく掘り込み部分が埋没しにくくなっていることが予想される。従って現況状態がかなりの精度で古墳群の遺存状態を示しているものと考えられる。また墳丘の遺存面はコンタがなだらかで端部が不明瞭であるがおおよそ標高18.7mのラインが墳端として考えられる。出土遺物は表土から黒曜石剥片が1点出土するのみで古墳の時期を示す遺物は出土していない。墳丘形態等から古墳時代前期に属し埋葬主体には割竹形木棺を使用しているものと考えられる。

出土遺物（第7図1）

1はトレンチ表土中より出土した黒曜石剥片である。踏査を含めこの遺物が本調査における唯一の検出遺物である。器



第7図　1号墳溝出土遺物実測図（1/1）

種は縦長剥片である。剥片の両側辺に微細な剥離が観察され、いわゆる「二次調整剥片」もしくは「使用痕ある剥片」とすることができる。長さ3.1㎝、幅2.6㎝、重さ4.87gを測る。

石材は漆黒色で不純物の少ない良質な黒曜石であり、剥離面の風化ははさほど進んでいない。背面と打面に自然面が残る。自然面は平滑であり、面の構成から見て原石は角礫状であったと見られる。科学的分析は行っていないが、以上の観察から佐賀県伊万里市腰岳産出の黒曜石と推定される。

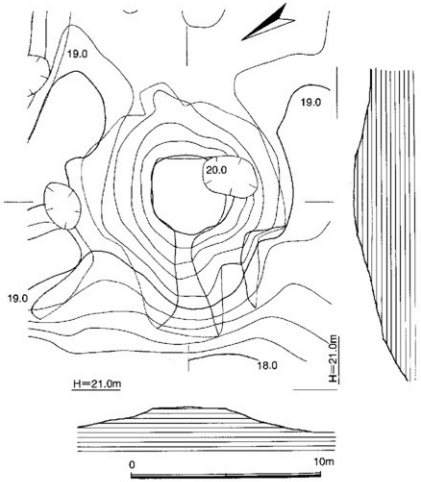
剥片剥離は先行して左側から二回の剥離を行った後、90°転移して本剥片剥離を行っている。打面は自然面であり、打角は直角に近い。バルブの状況から数回の打撃が行われた後剥離されている。本剥離は階段状剥離となり、先端は丸まっている。こうした状況から本剥片は原石より初期に行われた石核調整に伴う剥片と考えられる。

剥片の両側辺には背面から裏面に向かっての微細剥離が見られる。いずれも幅0.2mm以下のものである。側辺の刃部を利用し何らかの使用が行われていたとみられる。

本石器は形態や属性からみて縄文時代後期後半から弥生時代前期前半に所属すると考えられる。

3) 2号墳

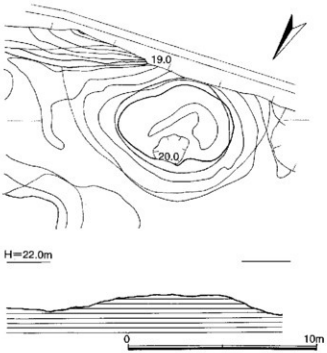
1号墳の西側に位置する。現状では全長12mで主軸方位をN-61°-Wにとり前方後方形を呈する古墳である。前方部状の張り出しは1号墳の様な明確な平坦面をもたず後方部上面から緩やかに傾斜しており、明らかな前方部といえない点もあるが前面裾は1号墳同様に丘陵斜面に面しラインを1号墳前方部前面とほぼ揃えている。また西側くびれ部分に矩形の攪乱があり形状を分かりにくくしている。後方部は墳端がやや不明瞭であるが長さ約8m、幅10m、高さ1mを測り、頂部平坦面は4mの方形を呈している。東隅の小さな張り出しは倒木の痕跡であろう。2号墳には明瞭な周濠は確認できない。また1号墳の周堤が2号墳直前で失われていることや周濠の一部を埋めている事などから1号墳に後出するものと考えられる。形状については前方後方形の可能性が高いものとして考えておきたい。



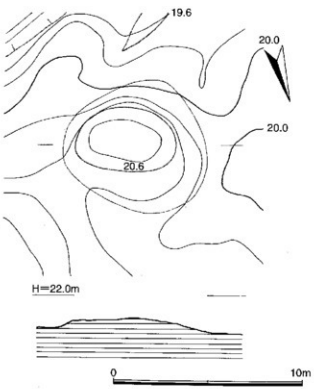
第8図　2号墳実測図（1/200）

4) 3号墳

対象地南側に位置し道路の切り通しにより北隅を破壊されている。



第9図　3号墳実測図（1/200）



第10図　4号墳実測図（1/200）

現状で径約11mを測る円墳である。墳丘高さ70㎝をはかり、墳頂部分は径6m程度の円形に平坦面を持ち大きな倒木痕が1箇所に残っている。墳裾には痕跡的に周濠が残っており一部は1号墳の周濠と重複している。また1号墳の周堤が3号墳周濠付近で途切れており、1号墳の周堤を一部破壊して構築したのもと考えられる。

5) 4号墳

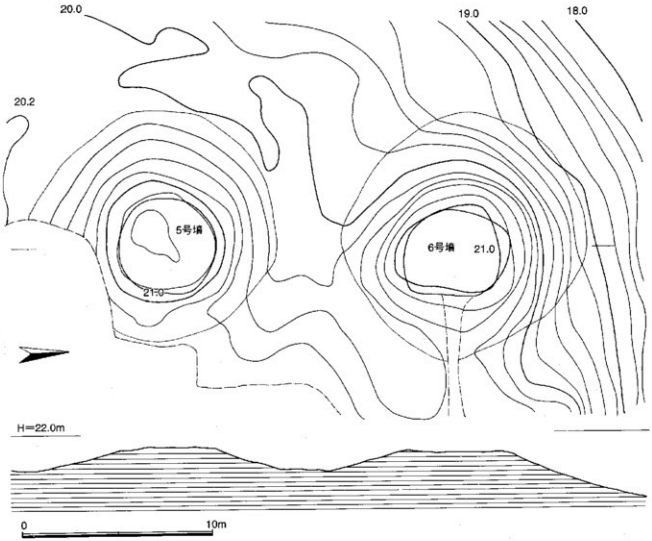
対象地南東隅に位置する。径8m、墳丘高さ70㎝を測る円墳である。南側が通路造成により一部カットされており墳丘形がやや歪になっている。墳頂平坦面は3.5m×5mの長円形である。現況で周濠は確認できない。

6) 5号墳

対象地北端に位置する。6号墳と並びいずれも遺存状況が良好である。径12m、墳丘高さ1.3mを測る円墳である。墳頂部には径5mの円形の平坦面を有する。墳頂部には檜1本と倒木痕が1箇所あるがあまり荒れた感じはない。4号墳～6号墳にかけては台風による倒木が少なく全体にうっそうとしている。6号墳との間に周濠が痕跡的に残っているが現状では不明瞭である。

7) 6号墳

5号墳の北側に位置し丘陵の北側急斜面に面している。径13mの円墳で墳丘高さは南側では85㎝であるが北側からは2m程度となり斜面側から見るとかなり視覚的に大きく感じる。平坦面は現状で径5m程度であるが現在祠が数基環状に配列されている。これは墳丘を削ったものというよりは本来の平坦面をそのまま利用したものであろう。周濠は南側1/3程に痕跡程度に残っている。



第11図　5・6号墳実測図（1/200）

8) 7号墳

7号墳～9号墳は丘陵西側先端部に尾根上に並び、いずれも破壊が著しく遺存状況は不良である。丘陵北側急斜面に面して北より6号-5号-1号-2号-7号-8号-9号と並ぶような配置である。特に1号墳から西は等間隔に配置されているようである。

7号墳は現状で径約8mを測る円墳である。墳丘は20㎝程しか残存しておらず削平・倒木による欠失が著しい。周濠は不明である。

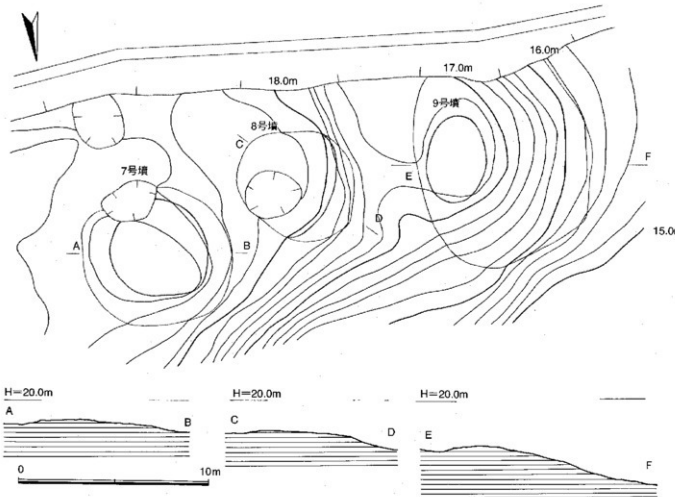
9) 8号墳

東側では墳丘は確認できないが西側で50㎝程度の高まりを確認できる。現状では径6m程度である

が本来はもうひと回り程度の大きさはあったであろう。削平が著しく周濠も明らかでない。

10) 9号墳

丘陵先端部分に位置する。径約9mの円墳である。墳丘高さは東側で20cmであるが西側では1.5mを測り、斜面からの見かけ状は大きくなっている。周濠は東側に痕跡的に観察できる。



第12図　7・8・9号墳実測図（1/200）

11) 小結

今回の確認調査は1号墳の一部を除いて掘削を行うことができず、基本的に伐採・踏査・現況測量に止まったため古墳群の内容については不明確な点が非常に多いが、今回明らかになった点を含め幾つかの特徴を列記してまとめにかえたい。

1．本古墳群は標高14m～21mの丘陵先端部に立地し、砂礫台地が扇状地平野に落ち込む前面部分に位置する。古墳群は現況で前方後方墳2基（2号墳については形状がやや不明瞭）、円墳7基の計9基から構成されている。

2．踏査・トレンチ調査を含め遺物は黒曜石剥片1点のみで古墳群と関連する遺物は確認されていない。また古墳に伴う石材の露頭もない。

3．1号墳は周濠・周堤を有する前方後方墳で墳丘長23mを測る。またトレンチ調査から後方部・

周堤は地山を削り出して成形していることが確認できた。また周濠部分にも腐食土等が堆積しておらず、現況状態が古墳群の遺存状況をかなり反映しているものと考えられる。

4．7基の円墳のうち旧状の遺存具合のよいものはいずれも低墳丘で墳頂に平坦面が残っている。

5．本古墳群は前方後方墳である1号墳を中心に構成され、埋葬主体はいずれも石材を用いない木棺直葬等が考えられるが箱式石棺の可能性も考えられる。構築時期についての詳細は不明であるがこれらのことから考えて古墳時代前期に形成された古墳群の可能性が考えられる。

写真1　天神森古墳出土　三角縁三神三獣鏡（参考資料）

写真2　調査区遠景（西から）

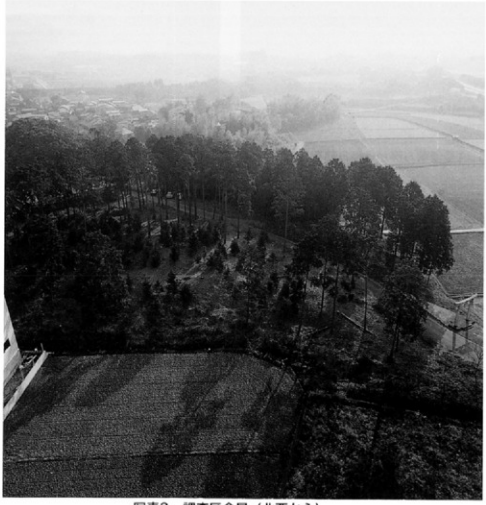


写真3　調査区全景（北西から）

写真4　調査区全景（真上から）

写真5　1号墳全景（西から）

写真6　1号墳前方部から後方部を見る

写真7　1号墳東部周濠・周堤（南から）

写真8　1号墳トレンチ　1（西から）

写真9　1号墳トレンチ　2（北から）

写真10　1号墳トレンチ　3（北西から）

写真11　1号墳トレンチ　4（西から）

写真12　1号墳トレンチ　5（東から）

写真13　2号墳（南から）

写真14　2号墳（南西から）

写真15　3号墳（北から）

写真16　4号墳（東から）

写真17　5号墳（東から）

写真18　6号墳（東から）

写真19　7号墳（西から）

写真20　8号墳（西から）

写真21　9号墳（北から）

部木古墳群

—福岡市埋蔵文化財調査報告書第623集—

2000年（平成12年） 2月15日

発　行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印　刷　有限会社グランド印刷

福岡市南区三宅3丁目15番21号